特集

新型コロナウイルスを拡大させない！
企業ができる対策を考え、岩手スタイルで働こう。

経済活動の活性化と共に、全国で新型コロナウイルスへの感染者数が増加する今、感染者ゼロを維持する岩手県。夏休みシーズンを迎え、帰省や観光による交流人口の増加が想定される盛岡エリアの事業者は、一層気を引き締め対応する必要があります。今回は、岩手県医科大学附属病院感染制御部部長・教授の櫻井滋氏に話を伺い、一人ひとり、そして企業がとるべき感染防止対策について再確認していきます。

■周りに「感染させない！」という意識で行動する

ー第2波が押し寄せる今、改めて、一人ひとりが取り組むべき対策を教えてもらえますか。

岩手県医科大学附属病院
感染制御部部長・教授　櫻井　滋 氏

櫻井　「自分が感染しないように」という発想で行動する人は、自身も家族も守りきれません。お互いが**「人に感染させないように」**という意識を、常に持って行動することが重要です。意識=物理的な距離です。

当たり前ですが、距離を取るためには「人に会わない」ことが基本。(今日のような)インタビューも最短に済ませるべきです。挨拶等はメールで事前に済ませ、会う必要がある用件だけをこなす。名刺交換は、まさにソーシャルディスタンスが求められる場面。私は交換した名刺をスマホで写真を撮ってそのまま捨てる方法を取りますが、従来の習慣から「捨てるのは失礼」と思う方も多いでしょう。情報を残しておけば相手に対して失礼に当たらない。それが、いわゆる「新しい生活様式」ということになるのです。

ーもとの生活に戻るのではない、ということでしょうか？

櫻井　そうですね。これまでの日常を大きく飛び越えた変化を求められています。コロナウイルスは既に6種類確認されており、7種類目がCOVIDー19(新型コロナウイルス)となります。インフルエンザも新型と呼ばれるウイルスが度々出てくるように、理屈上コロナウイルスが消滅することは考えにくい。消滅する時は人間も消滅しているかもしれません。

自然収束を待つのではなく、一人ひとりが対策を継続しなくてはならない。そして、まだ感染者が出ていない岩手だからこそ構築可能な対処方法があるのではないかと思っています。

ー「3密回避」「手洗い」「マスク着用」の徹底が求められますね。

櫻井　「3密を避ける」という表現はコンパクトで覚えやすいですが、具体的方法は、各々が置かれた状況で自身がしっかり考え行動しなくてはなりません。

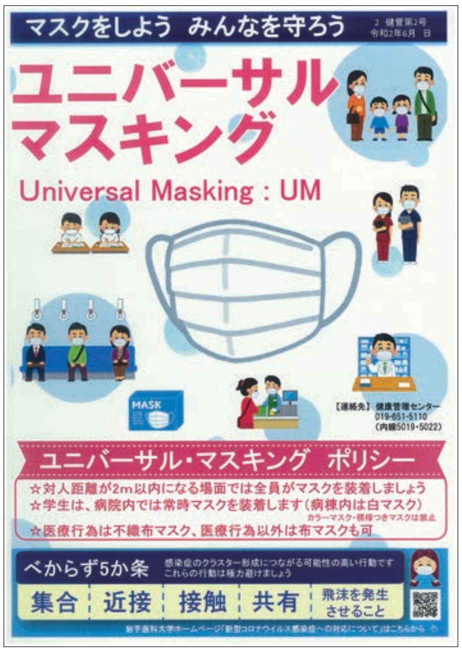
岩手医科大学では、5つの”べからず“を具体的に明示しています。**「集まらず」「近づかず」「触れず」「共有せず」「飛沫を発生させず」**。集まって、近づいて、触ると3つのリスクが重なるということです。さらに、大きな声で叫んだり歌ったりすれば飛沫は遠くまで届きますし、話しながら歩くのは飛沫を振りまきながら動くようなものですから、感染対策という点でリスクが高い行為といえます。

手洗いに関しても、家庭でふだん行う手洗いではなく、病院で取り入れている「手指衛生」を行ってくだ

さい。具体的な方法はWHOのホームページにも紹介されていますが、**6つの表面（掌、甲、指間、指先、親指の根元、手首）をまんべんなく洗う。**消毒液を使うなら、肉眼で汚れがないことを確認してから使うこと。臭いで汚れを確認するためにも香水等は控え、身に着けるものはシンプルに。汗が付着するアクセサリーや時計類もつけない方が望ましいでしょう。

WHOのホームページ：https://www.who.int/gpsc/clean_hands_protection/en/

マスク着用も、「飛沫感染予防をしましょう」と言う、いわば見える掛け声です。お互いに感染対策に参加している意思表明の視覚化であり、祭りに例えるなら、同じ組の半纏を羽織るようなもの。岩手医科大学では、「ユニバーサル・マスキング」を標語に掲げ、職員や学生間で意識共有を進めています。



岩手医科大学構内に掲出されている標語ポスター

■企業内の安全確保が地域全体のリスク低下につながる

―事業者の感染対策へのアドバイスは？

櫻井　最近は、陽性者の行動履歴に対する根拠のない批判も多く、施設や事業者がスティグマ(＝差別や偏見のこと)を受けることもあります。重要なのは、従業員の行動記録や来訪者記録などの情報を必要に応じて閲覧可能な状態にしておく事です。隠したり、ごまかしたりするのではなく、第三者に対して積極的に見てもらうという心構えが重要です。自社の安全を証明するツールとして管理し、必要に応じて根拠を示すことがスティグマの回避になります。

例えば、ビジネスで出張後2週間自宅待機をルール化するのは、各事業所の実情に照らし合わせた場合、現実に難しいかもしれません。ただ、出張後の数日間は午前中のみ出社して外部との接触は控える、社員同士のミーティング参加は避ける、このレベルなら自宅待機を指示するなど、段階的に感染リスクを減らすことはできます。感染症対策の医療機関が設置する「トランジショナルゾーン（移行ゾーン）」をヒントに、帰社した社員が部署に戻る前に、手指衛生・着替え・消毒を行うゾーンを設置するなどの工夫もできます。その後、トイレに行って手指衛生せずに戻れば無意味ですが(笑)。

具体的な対策を行うにあたっては、事業所内の仕事を細かく分類し、それぞれの業務で起こり得る感染リスクを洗い出し、個々に対策を講じていくのも有効です。感染対策はハード面とソフト面それぞれにおいて意識的に行う「客観的管理」が必要です。医療施設の基準等を参考に、**社員全体を巻き込んで**対策レベルの底上げをしていくことが大事ではないでしょうか。

―感染対策への意識はどう変えていけば良いでしょうか？

櫻井　岩手県の皆さんは、辛い経験となった東日本大震災津波によって「自然の変化を受け入れて生きる」という意識が根底に根付いていると感じます。加えて、古くから岩手に息づく保守性は、今回の取り組みにおいて良い意味で強みといえるでしょう。

医療機関では、感染蔓延に備えて粛々と体制整備を進めていますが、もともと岩手県は医療体制がひっ迫した状態であり、充分な対策のために行える新たな投資は限られています。そのため、一人ひとりの感染対策が重要になってきます。

また、企業においてはコロナ対応の視点でビジネスを考えていくと、新しい産業が生まれる可能性もあります。既存の様々な仕組みを科学的な考え方を背景に据えて捉える事で、リノベーションあるいはイノベーションが起こりやすい状況が生み出されるでしょう。

そして、遠方から来られる方については、まずは歓迎する気持ちが大事です。警戒と排除は全く別な考え方です。首都圏の方策とは異なる歓迎の仕方を考える事で、**岩手独自のスタイルを作りあげる**、いいチャンスでもあります。

（取材日／令和2年7月14日）

櫻井氏の話は、現状を自分たちの眼でしっかりと捉え、できる対策を確実に行っていく大切さを再認識するものでした。経済振興と感染防止という両輪を、いかに進めていくか。常に当事者意識を持って取り組んでいきましょう。